Japanese Association for Religious Studies

て生きる西洋にこそ、自己に内在する自己ならざるもの、超越なるものを認識して生きるという人間存在の理想的なあり方が実践されていると新渡戸は見たのである。ここに、彼のクェーカー派を通じたキリスト教信仰に基づく人間観が反映されていると考えられる。

新渡戸は、「内部の矩」を核とする思想としてデモクラシーを挙げ、「世界の大勢」と予言する。そして、彼はデモクラシーを「平民道」と呼び、日本の道徳観念として象徴した武士道精神に替わる思想とした。

以上みてきたように、新渡戸が西洋との交流を深めたのは、人間存在のあり方において、西洋が日本の手本であると考えていたからであると考えられる。

聖書・学問・共同体
――東京大学「矢内原忠雄展」からの一報告――

柴田真希都

二〇〇九年三月末から六月末にかけて、東京大学は付属の駒場博物館において「矢内原忠雄と教養学部」展を開催した。会期中には約五千人が訪れ、月に一度ずつ行われたシンポジウム企画はどれも好評を博した。特に「矢内原忠雄とキリスト教」をテーマとした最後のシンポジウムでは、東大駒場キャンパスで最も大きい講堂を一杯にするほど全国から沢山の人々が訪れ、関係者一同を驚かせたのであった。

さて、この「矢内原忠雄と教養学部」展は、矢内原が初代学部長を務めた東大教養学部創設六〇周年を記念して企画された。矢内原は二年半で教養学部長の地位を離れ、総長に就任するが、彼は総長となっても教養学部の行く末と学生達の勉学環境の向上に特別の関心と努力を払った。しかしながら、そのような矢内原と彼を支えた人達の苦闘の記録は既に学内外に十分には残っておらず、この展覧会企画を後押しした教養学部六〇年を記念する草創期にまつわる展示資料は結果として手薄となったといわざるをえない。

それとは対照的に、矢内原忠雄の学術的側面、そしてキリスト教伝道の側面は、豊かな資料に恵まれつつ、充実した展示内容となったといえる。従来、駒場博物館は矢内原が南洋群島の調査旅行から持ち帰った数々の現地品のコレクションを所蔵していたが、それらが一同に公開され、視覚的に華やかな印象を与えたと共に、各方面の援助を借りつつ、彼の現地調査において使用された文書資料や図、絵葉書や名刺などが集められて、植民政策学者矢内原忠雄についての広くまとまった知識が提供されたと思われる。

また、矢内原忠雄を語るのに不可欠な側面であるキリスト教伝道についても、彼の立脚した無教会キリスト教の独自性、さらに第二次大戦中の政府社会からの激しい弾圧にもかかわらず、一貫して時局に対する批判的立場を堅持した個人雑誌（『通信』『嘉信』）や講演活動の軌跡が、数々の資料によって後づけられた。会場では各所に飾られた、生涯の秘蔵写真の

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

数々とともに、晩年の公開講演における貴重な肉声も披露され、特に生前の矢内原の面影を知る人々から非常に大きな反響を得ることができた。

このように、展覧会は各方面の多大な支援と、幅広い分野の方々の熱心な参画によって、教育・学問・信仰という三つの主要な領域から、矢内原忠雄という人物についての新たな像を結ばせていった。会場で行われていたアンケートには、思想的混迷を深める今こそ、矢内原のような一貫した立場に身をおいて高い批評精神を発揮し、時代を導いていった指導者の足跡と著作を紐とき、思想家としての彼を再評価すべきであるとの声が多数寄せられた。その関心と最も呼応することとなった「矢内原忠雄とキリスト教」を主題としたシンポジウムにおいては、矢内原の学問的・伝道的批評活動、公事と私事との峻別、他民族への愛、聖書研究の特色と共同体形成などの論点が、多角的かつ総括的に議論された。

以上のような展示、発表、議論を経て自然と浮かび上がってきたのが、矢内原の果たした歴史的な役割の重要性と、時代を経てもなお批判力を失わない、学問的思索態度と社会的言動との連関の奥深さである。彼は戦前は植民地研究、戦中は聖書研究、戦後は大学教育に主要な活動の場を得たが、そのいずれにおいても既存の制度を私化して超国家的正義を軽んずる権力者への絶えざる批判と、社会的弱者への愛と励ましを明確化した。彼はそのような独立した立場を、雑誌発行によってつながりを得た多くの見えざる共同体の構成員たちによって支えられたのだった。身心ともに弱い単独の人間が学問的教養と聖書の言葉を携えて、いかに覚悟と連帯の共同体を継続させていったのか。その足跡を丹念にたどる作業こそ、矢内原の思想全体を新たな奥行きをもって起立させる一つの鍵だと考える。

遠藤周作の思想「母なるもの」再考

長谷川（間瀬）恵美

遠藤周作（一九二三―一九九六）の文学活動における宗教的主題は、「いかにしてキリスト教が日本文化内において開花することができるか」というキリスト教の実生化（incultura-tion）の問題であった。私は、遠藤が第一段階（相克）［一九四七―一九六五］において発表した数々の短編小説、評論等の中で使用する「汎神性（パンテイスム）」という語を考察することで、その後に展開される「母なるもの」という思想に積極的な評価を見出すことができると考えた。

汎神論（Pantheism）は、宇宙全体がそのまま神であるという思想であることから、「天地万物の創造主である神」と「被造物である世界」との区別が見失われる。そこで、唯一神論のキリスト教世界では、汎神論は否定されてきた。しかし、キリスト者遠藤が語る「日本的汎神性」とは、汎神性を母体とした日本的感性のことであり、一般的な用語とは異なる。それは、自然描写等において神の存在を感じることであり、例えば雪を美しいと感じることが同時に、「聖い」「清い」と感じることで

NII-Electronic Library Service